東京外国語大学 博士学位論文 Doctoral thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

第 5 章

結 論

以上、本論文ではスペイン語の直説法単純過去形と現在完了形の機能分担について、現代語におけるバリエーションと歴史的な推移とを概観し、その関係性を考察してきた。二形式は現代イベリア半島スペイン語の一般的な使用において、それぞれ「発話時と断絶した過去」、「発話時と関連づけられた前時性」として区別されるが、こうした区別は現代のスペイン語圏の全ての地域に共通しているわけではなく、また通時的にも一貫して見られたわけではない。ここで、各章でおこなった考察をまとめてみよう。

第1章では、単純過去形と現在完了形について、半島スペイン語の一般的使用における基本的な意味と用法を確認した。前述の通り、二形式は「発話時との関連付けの有無」によって区別されるという見解が、従来の研究の大勢を占めている。単純過去形は発話時と断絶した絶対的な過去を表し、現在完了形は発話時と関連をもつ、発話時以前の事象を表す。現在完了形については、具体的な用法として「発話時における結果状態」、「発話時に至る継続・反復」、「直前の完了」、「拡張された現在の完了」などを表す。

こうした意味の規定においては、各形式の時制的・アスペクト的特徴が問題となる。1.2.では、これらの概念に関わる問題を整理した後、本論文が支持する規定の方法を確認した。二形式は時制的にもアスペクト的にも異なる特徴をもち、単純過去形は、時制的には「＋過去」、アスペクト的には「－前時, ＋完結」と、現在完了形は、時制的には「－過去」、アスペクト的には「＋前時」と規定するのが、各形式の実際の用法をよく反映しており、適切であると考える。

続いて、二形式の意味規定に従来の時制区分やアスペクト的特徴を用いない、その他の論考を確認した。発話時点および言及時点との時間的関係(anterioridad, simultaneidad, posterioridad)だけによって、時制体系全体を規定しようとする立場[Rojo & Veiga (1999)]と、テクストの中でとられる発話態度との関連において時制を規定する立場[Weinrich (1974, 1982)]を確認し、その特徴と問題点を検討した。

最後に、時の副詞類と各形式との親和性に注目し、「発話時と関連をもつ前時性」を表す現在完了形は、発話時を含む時間を表す副詞類と共起しやすく、「発話時と断絶した過去」を表す単純過去形は、発話時と対立する過去の時間を表す副詞類と共起しやすいことを確認した。

第2章では、現代語における二形式の機能分担のバリエーションについて考察した。

まず2.2.では、「半島スペイン語の一般的使用」対「イスパノアメリカの単純過去形優勢地域」という大局的な視点から先行研究の概観をおこなった。現代イスパノアメリカの多くの地域で単純過去形の優勢が見られるということは以前から指摘されてきたが、この「優勢」

の内情は、これらの地域で二形式が自由変異的に用いられ、その結果単純過去形が優位に立っているということではなく、各地域で二形式の使い分けが異なっているということである。

実際のアメリカスペイン語の単純過去形の用例を見ると、「拡張された現在」(特に「直前」)の事象に言及して単純過去形が用いられる点で半島スペイン語との違いが見られる。半島スペイン語では現在完了形が担当することが多いこの用法に単純過去形が用いられることで、アメリカスペイン語では現在完了形のそれ以外の用法、特に「継続・反復」用法が割合上際立つことになる。こうした傾向を反映して、Lope Blanch (1961)のように現在完了形にimperfectivoの価値を与える論考もなされてきた。

もっとも、2.3.でとりあげたメキシコスペイン語の現在完了形についての個別調査[寺崎(1979)]において、半島スペイン語の現在完了形がもつ全ての用法にわたって用例が見られたことからも、現在完了形は「継続・反復用法」に完全に収束しているわけではないことが明らかとなった。このことからも、半島、メキシコに代表される二大バリエーションの地域間で、二形式の基本的価値に違いはないと言える。ただし、実際の使用レベルでは二地域間で状況が大きく異なり、「直前の完了」(もしくは「拡張された現在」の完了)を表す形式選択の際に頻度的に大きな差が生ずると言える。

先行研究によるこうした考察を受けて、2.4.では二地域における使い分けの相違部分を詳しく見る目的から、半島、メキシコのスペイン語に焦点をしぼり、現代戯曲における二形式の使用状況を観察した。その結果、予想通り「直前の完了」用法を表す形式の選択に二地域の違いが現れた。現在完了形の割合が多い半島スペイン語と、単純過去形の割合が多いメキシコスペイン語では、二形式の使い分けに異なる基準が働いていると考えられる。「発話時との関連性の有無」という視点を優先させる半島スペイン語では、完結した事象であっても、発話時と関連をもつと見なされれば現在完了形が用いられるのに対し、メキシコスペイン語では、発話時まで事象(あるいはその効力)が存続している場合にしか現在完了形が用いられないことが多い。これと相関する形で、メキシコスペイン語では単純過去形が、完結した事象であれば発話時との時間的遠近に関わらず担当し、「直前の完了」や「拡張された現在」の完了の領域をもこの形式が覆っていると言える。以上からも、この「直前の完了」や「拡張された現在」の完了という用法がこれら二大変種を分ける鍵となっていることが分かる。

続く第3章、第4章では、現代語における地域的バリエーションを通時的観点からとらえなおすことを試みた。イスパノアメリカの多くの地域に見られる上記のような状況は一見、単純過去形については、ラテン語から受け継がれた古い機能をとどめているようにも見え、現在完了形については、意味的発展の古い段階をとどめているようにも見える。これまでにも、現代アメリカスペイン語の状況と、中世以降español preclásicoまでの半島の言語状況との類似性を指摘する論考がなされてきた[Lope Blanch (1961), Cartagena (1999)]。半島スペイン

語では、現在完了形はその起源的意味「現在における結果」から、徐々に過去の領域に侵入していき、発話時と関連をもつ過去の事象や、発話時の直前の事象を表すようになり、現代語に至っている。ところがアメリカスペイン語では、現在完了形のそうした機能的侵略が遅れており、これと相関して、español preclásico に見られたとされる直前の事象を表す単純過去形の使用が維持されているように見える。こうした根拠から、現代アメリカスペイン語の状況を「アルカイスモ」とみなすのである。果たして実際に植民地時代の半島スペイン語は、現代アメリカスペイン語におけるように明瞭な単純過去形優位の状況を呈していたのだろうか。そしてその状況がそのままアメリカ大陸に移植されて、今日まで維持されてきたのであろうか。

こうした問題意識から、第3章では、第4章でおこなう植民地文書における二形式の使用状況の調査に先行して、15世紀末〜17世紀の半島スペイン語における状況を観察した。

まず3.2.では、二形式のラテン語における起源から、中世スペイン語を経て17世紀に至るまでの機能的変遷を概観した。単純過去形はその起源において二面性をもち、"perfectum historicum"と"perfectum praesens"のどちらの領域も覆っており、過去の事象であれば現在との関連付けの有無に関わらず表すことができたとされる。一方現在完了形の起源である迂言形は元来、habere の語彙的意味が保たれた、現在における所有状態を表していた。

中世スペイン語においても、上述の起源的な意味は各形式についてある程度保たれていたが、やがて、現在完了形による過去の意味領域への発展に伴い、単純過去形は perfectum praesens の機能を弱めていくことになる。この過程は急激に生じたというよりも、徐々に進んでいったと推定される。というのも、14世紀から15世紀にかけても、単純過去形が二面性を保持していると見られる用例が確認できる一方で、現在完了形が「拡張された現在」における点的な事象を表している例もすでに見られるからである。つまりこの時代には、現代半島スペイン語のような区別に向かう前段階として、二形式が共存する過渡的な状態が見られたと考えられる。

3.3.では、この時期以降の二形式の使用状況を検証するため、15世紀末から17世紀にスペインで書かれた作品を調査した。ここでは、戯曲形式と自伝形式という異なるジャンルの作品を用い、「発話時と関連する過去」の事象を表す文脈での各形式の現れ方を観察した。

3.3.2.でとりあげた戯曲形式の作品については、「直前(拡張された現在)の完了」の用法について、単純過去形のみならず現在完了形も用いられることが明らかになったが、そこでは、どちらかの形式が明らかな優勢を見せているわけではなく、作品によってもばらつきが見られた。この点で、第2章で観察した現代半島スペイン語や現代メキシコスペイン語のような、一方の形式が明らかな優位に立つ様相とは異なっている。もっとも、現在完了形が「直前(拡張された現在)の完了」の用法で用いられる頻度はどの作品においてもかなり高く、当時すで

にこの形式の主要な用法になっていたことが推定される。この点でも、メキシコスペイン語型の現在完了形の状況とは異なる。

3.3.3.でとりあげた 16 世紀の自伝形式の作品においては、両形式は多くの場合、現代半島スペイン語と同じように区別されていることが明らかになった。テクストの性質上、上記の「直前の完了」の用法自体出現しにくいという問題はあるが、テクスト上の既出の部分に言及する場合に、現在完了形の出現が支配的である状況が見られた。これはいわば、テクスト上での「拡張された現在の完了」の用法とも言え、この用法での現在完了形の頻出は、同じ時代の戯曲形式作品における同形式の使用傾向と共通している。

以上のような観察から、当時、単純過去形は二面性を見せる場合があった一方で、現在完了形は、「直前(拡張された現在)の完了」の用法の多さからしても、過去の意味領域にかなり侵入していたことが推定される。つまり、これらの用法について二形式が共存する過渡的な状況が続いていたと考えられる。さらに言えば、大航海時代の半島スペイン語の状況は、現代アメリカスペイン語に見られるような、「直前(拡張された現在)の完了」の用法における単純過去形優勢の状況と必ずしも一致していない。したがって、現代のアメリカスペイン語の状況を、大航海時代の半島スペイン語の状況が移殖されてそのまま保持されているという意味でアルカイスモとみなす考え方にはかなり検討の余地がある。

こうした予備的考察を受けて第 4 章では、植民地時代にアメリカ大陸で書かれた、もしくは本国とやりとりされた文書における状況を観察した。ここでの観察結果も、同時代の半島スペイン語で見られた状況と同様に、現代半島スペイン語とも、現代メキシコスペイン語型の状況とも、必ずしも一致していない。本論文で一貫して注目してきた「拡張された現在(直前)の完了」における各形式の出現状況からは次のような観察ができる。

まず、現代半島スペイン語との相違点としては、現代半島スペイン語では、現在完了形の「拡張された現在(直前)の完了」の用法が非常に発達しているが、ここで調査した資料では、この用法を単純過去形が表している例もかなり混在しているという点があげられる。

一方、現代メキシコスペイン語などのアメリカスペイン語との相違点としては、アメリカスペイン語では、「拡張された現在(直前)の完了」は単純過去形が担当することが圧倒的に多いが、ここでの調査ではそうした明瞭な偏向は見られないということである。現在完了形がこの用法を表している例もかなりの割合で見られる。また、「継続・反復」用法に関しては、現代メキシコスペイン語などでは、現在完了形の総数に占めるこの用法の割合は、「拡張された現在(直前)の完了」用法に比べて圧倒的優位に立っているが、ここでの調査結果ではそうした明らかな優勢は見られなかった。

植民地時代の文書に見られるこうした傾向は、むしろ同時代の半島スペイン語の状況に近いと言える。第 3 章で確認した通り、同時代 15 世紀末から 17 世紀の戯曲作品や自伝形式の

作品では、「拡張された現在(直前)の完了」の用法における二形式の混在が見られた。とりわけ戯曲作品では、これらの用法をとる二形式の総数のうち、単純過去形が5割から6割を占める作品もある一方で、現在完了形はいずれの作品でも約4割以上、作品によっては8割を占めている。

以上の観察結果は、当時の半島スペイン語で見られたような過渡的な段階が、植民地文書にも反映されている可能性を示唆している。現代メキシコスペイン語などに見られる単純過去形の優勢は、移殖期当初から明瞭な形で見られたわけではなく、こうした過渡的な段階を出発点として、後の時代に形成されていった可能性を考える必要があるであろう。この点からも、現代イスパノアメリカの多くの地域に見られる単純過去優勢の状況を、中世スペイン語の段階の保持であるとする見方にはやはり問題があると言わざるをえない。

以上、現代語に見られる二形式の使い分けの地理的バリエーションを通時的な観点からとらえなおし、その関連性を探る試みをおこなってきた。現代半島スペイン語とアメリカスペイン語の共通の基盤となる時代である、植民地移殖期の半島とアメリカ大陸で書かれた資料における使用状況を見る限りでは、現代語のいずれの変種も、二形式の使い分けをその時代から変容させずに維持しているとは言い難い。各変種は、その共通の基盤で見られた混沌とした状況を出発点として、各々独自の基準をもとに二形式の使い分けを確立していったと推定される。「スペイン語の歴史の中で見られた古い段階との一致とその絶えざる保持」を「直接的な関連性」ととらえるならば、この意味では、現代語における両変種のいずれにおいてもそうした古い段階との関連性は見い出せないと言える。

本論文の調査で得られたデータを見る限りでは、いつ頃からアメリカスペイン語で現代語のような単純過去形優位の使い分けが見られるようになったのかという問題を考察するには至らなかった。今後の調査による検証が課題となろう。そうした検証を含め、関連テーマの研究にとって本論文がいくらかでも貢献となることができればと願う。